

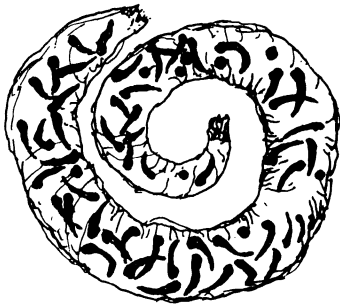
# 丹波（氷上郡・多紀郡）のサンショウウオ

松 山 確 郎\*

3, 4年前から丹波の小学校児童・中学生等が見つけたオオサンショウウオの幼生・卵塊の報告をうけて調べてみた。専門的にこの方面を調査研究している者でなく、また成体を得ての報告でもないことをおことわりしておく。幼生の飼育は県立柏原高等学校仲井啓郎先生、町立篠山中学校五十川美智子先生及び生徒諸君が行った。殊に篠山中学校では、いろいろの工夫をしながら完全な変態完了まで成功し、記録することが出来た。両先生に敬意と謝意を表する次第である。主として佐藤井岐雄著日本有尾類総説を参考とした。御示教を乞う次第である。

## 1. カスミサンショウウオ

流れのほとんどない溝の底でみつけられた卵塊からカスミサンショウウオと同定した。すべて産卵直後でなく、学校に持参されたときには発生はかなり進み、動きはじめているものが多かった。第1図に示した卵塊は卵数の最も多い(63体)ものである。少ないものは40個体であった。図の卵塊は長径7.0cm、短径5.5cmで、紐状で2回位捲いている。ほとんど何物にも付着せず、泥上に産卵されている。卵塊の太い部分の径は1.5cm~1.3cm。みつかった場所・日時その他は次のようである。



第1図 カスミサンショウウオ卵塊  
昭和63年3月30日 採集

昭和61年6月18日 氷上郡春日町国領山王の低い丘の南斜面の麓の水田の山際につくられた小溝の中である。同町進修小学校五年生山田君が幼生を十数個体採取し、学校に持参した。サンショウウオの幼生であることを教え、翌年春休み頃に注意してくれるよう指示した。

昭和62年4月14日 同君が同じ場所で卵塊を採取し、

\* 氷上郡春日町鹿場

学校に持参した。既に幼生3個体が泳ぎ出していた。卵塊の形などからカスミサンショウウオと同定した。

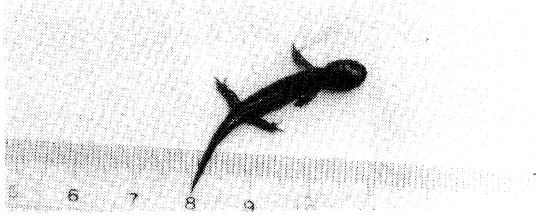
昭和63年3月30日 前述の小溝に出かけた。3ヶ所に2卵塊ずつみつける。そのうち2ヶを採取して帰る。大きい方のスケッチが第1図である。

昭和63年4月18日 多紀郡篠山町池上の水田地帯の溝で、篠山中学校渋谷先生が前日の溝さらえ(当地方では田植前に用水路を掃除する)のとき卵塊をみつけて学校に持参された。採集地は海拔200mあまりの篠山盆地の中心、篠山の町近く水田中で、低い山の麓まで300m位離れている。ただ近くに森のある神社の低い丘がある。

飼育 進修小学校で二回とも洗面器などで飼育を試みられたが、途中で減ってしまって、残ったものをもとの水田に帰された。

本年採取した大きい卵塊を、生徒への参考に柏原高校生物教室へ持参し仲井先生が浅い水槽中で飼育を続けて下さった。エアープンプを入れ、餌としてはアオミドロ、オタマジャクシの飼育に用いるハウレンソウの葉を煮たものであった。ハウレンソウのないときはスイバの葉で代用した。はじめは順調に大きくなっていった。しかし、途中から共食いが起こり、減少してゆく。結局1ヶ月半余で数体となり、近くの水田に放たれた。

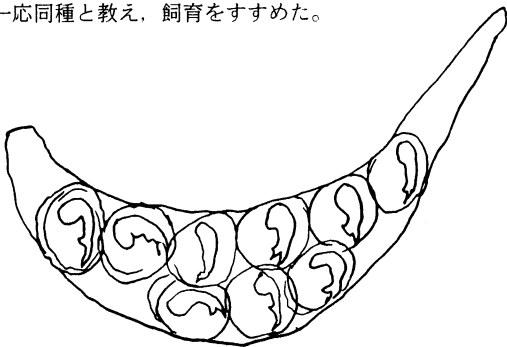
篠山中学校では後述するように、昨年にヒダサンショウウオの卵塊を飼育されたことがある。本年も4月12日に卵塊を大きい普通水槽中に石と共に入れ飼育をはじめられていた。18日渋谷先生持参のカスミサンショウウオ卵塊をこの水槽中に入れ飼っておられた。4月22日拝見したとき孵化しており、1cm大で黒色。ヒダサンショウウオは未だ孵化していなかった。昨年は餌としてきんぎょのえさ、カツオブシ細片などを用いていたが、柏原高校でのハウレンソウの葉を煮たものの使用例を教えた後は、これを試みておられる。生徒諸君が交互に廊下に置かれた装置の中のカスミサンショウウオを観察して、ノートに記録している。ハウレンソウ・きんぎょのえさ・カツオブシ等をよく食べている。しかし、途中から大きい個体が小さいのを共食いしているのを観察しており、数も減ってゆく。結局、孵化直後50匹以上いた幼生から一体だけ残った。7月7日に外鰓を消失して変態を完了、幼体となって水槽の一部に用意した陸(砂や石、土、その上にコケ類を植えた)に上がり、現在もコケ等の下の土中にもぐっている(第2図)。



第2図 カスミサンショウウオ幼体  
篠山町池上のもの 昭和63年8月15日撮影

## 2. ヒダサンショウウオ

昭和62年4月13日 多紀郡篠山中学校二年生が、遠足で多紀郡丹南町味間奥の文法寺へ行く。休憩時に生徒達がサワガニ採りに溪流で石を起こしているとき2卵塊を発見した。何かわからぬが調べようと、卵塊を石から引きちぎってビニール袋に入れ学校へ持ち帰る。担任の五十川先生の指導で飼育を始めた。何であるかわからなかったが、前述の進修小のカスミサンショウウオ卵塊が神戸新聞記事で写真と共に出了のを見て、サンショウウオの卵塊らしいと連絡下さった。生徒諸君が毎日日記をつけているのを拝見した。第3図は4月13日の生徒スケッチである。十分調査しないまま、かって柏原高校在職中生物班員の採ったブチサンショウウオを思い出して一応同種と教え、飼育をすすめた。



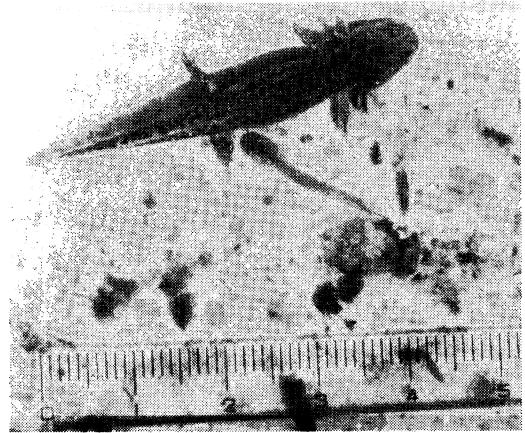
第3図 生徒のスケッチ (ヒダサンショウウオ)  
昭和62年4月13日採集

昭和63年4月12日 篠山中二年生が文法寺へ遠足。五十川先生が二年担任で同行される。溪流の石の裏に再び卵塊を見つける。今回は4卵塊付着の石もろとも、学校に持ち帰られて飼育をはじめられて連絡下さった。4月22日に撮影したのが第4図である。同形、同大の2ヶの卵塊が一对、牛の角を思わせるように一部で接して強固に石に付着する。わん曲部で径が最も大きく2.0cm~1.7cm、先端へ漸次細くなり尖って見える。卵数は12, 11, 8, 8計39個で美しい黄白色、既にかなり発生がすすんでいる。未受精卵もある。この卵塊の形や、卵数などからヒダサンショウウオと同定した。



第4図 ヒダサンショウウオ卵塊  
文法寺で採集、昭和63年4月12日採集、  
4月22日撮影

飼育 昭和62年度、はじめてだけに生徒達はなかなか卵囊からかえって出てこないで5月20日人工的に囊を破ると記している。外鰓をもち、前後肢も出来ていて奇異に感じたようだ。6月になって少しずつ死んでゆく。1日にあと6匹残ったが元気がないと記している。この年の飼育では7月の夏休み前に生き残り1匹、これが変



第5図 ヒダサンショウウオ幼生  
文法寺、4月12日採集、6月22日撮影  
下方はカスミサンショウウオ

態完了して陸に上り五十川先生が自宅に持ち帰られ飼育を続けられたが11月に死ぬ。液浸の標本とされている。

昭和63年度、飼育状況は前年同様であるが、前述のようにカスミサンショウウオと一緒に水槽である。餌は既述のようにホウレンソウの煮たもの、きんぎょのえさ等をよく食べる。5月10日頃から外鰓をもつ幼生が孵化してくる。5月末には4卵塊から計27匹が泳ぎ出てきた。第5図の6月22日は体長4~5cm内外になっていた。最初に変態完了して幼生となり陸に上ったのが7月18日、以後7月中に25匹が次々と幼体となり、コケ類の植えら

れた土中にもぐりこんだ。この種には共食いは全く見られず、カスミサンショウウオとは対照的であったことを観察している。夏期休暇中五十川先生宅で飼われている。その幼体の写真が第6図で、8月15日撮影のものである。1個体だけ飼育を続けられ、他は文法寺の谷へ放たれた。

ヒダサンショウウオの生息地は佐藤氏の著やその他の報文では1000米以上の山地とあるが、文法寺ではわずか300米のところである。産卵期をさぐって成体発見が大切である。



第6図 ヒダサンショウウオ幼体  
文法寺、昭63年8月15日撮影

### 3. オオサンショウウオ

昭和63年1月20日発行の兵庫生物誌上で栃本氏のオオサンショウウオの県下分布図を拝見した。少しばかりの記録であるが、最近丹波での分布記録をさぐったので、最近のものから記してみる。

水上郡下加古川上流では、昭和63年6月16日、青垣町遠阪の今出川橋下で藤賀さんが90cm大のものを発見。大勢観察のあと上流へ放たれた。五年ほど前にも今出川上流で見つかっている（神戸新聞丹波版、6月18日）。昭和50年6月18日、青垣町大名草の加古川上流の谷で体長80cmのものが神楽小学校に持ちこまれた。同校では観察のあと元の所に返してやった。（但し、大名草のどの谷か詳細不明）。青垣町西芦田クラマチ谷（現在丹波少年自然の家がある）上流では確実に生息しているのを何回か見ている植物研究者がいる。

水上郡下由良川支流の竹田川流域の市島町・春日町での観察記録は知らない。かって、市島町旧前山村の川で発見されたが、後にそれは古く但馬から貰われて飼われていたのが洪水で逃げ出したものであることがわかった。

多紀郡での一記録、昭和49年に篠山町辻の奥の谷でダム工事中に一体（大きさ不明）見つかっている。すぐに上流に返した。弥十郎岳北面の深い谷である。